日本統治下の台湾における〈万葉集〉教育と〈台湾万葉集〉の誕生

——呉建堂と伴走者としての犬養孝——

河路由佳

一　はじめに

孤蓬萬里こと呉建堂（一九二六－一九九八、以下、本名の呉建堂を用いる）の編著『台湾万葉集（正・続）』は、呉建堂が主宰する戦後台湾の「台北歌壇」で日本語の短歌を作っている一〇〇名近い人々を、呉建堂がそれぞれの作品を織り込んで紹介したものである。

『台湾万葉集』が一九九四年二月に集英社から刊行され、一九九五年一月には『台湾万葉集　続編』（以下、『続編』）が出て、日本のマスメディアでも話題になった。そして、この功績により呉建堂は一九九六年一月に宮中歌会始に陪聴者として招かれ、同年十二月には第四十四回菊池寛賞を受賞した。「台湾万葉集」という書名は印象的で、この本にかかる栄誉をもたらすのに一役買ったのは間違いない。

筆者はかつて河路（一九九七、二〇〇〇）において、これを戦後台湾における短歌のアンソロジーとして考察したが、二十年ほどを経て、河路（二〇一七）では、呉建堂個人に焦点をしぼり、呉建堂のいう「万葉精神」が、「台北歌壇」の実力ある歌人たちに必ずしも共有されていない独特のものであることを指摘した。本稿では「台湾万葉集」という書名に改めて注目する。〈台湾万葉集〉の内容は必ずしも〈万葉集〉にかかわるものではない。当初台湾で刊行された原著の書名は別のもので、

〈万葉集〉とは関連づけられていなかった。

〈万葉集〉を書名に掲げるに際しては、万葉学者、犬養孝（一九〇七～一九九八）が深く関与している。[1] 戦争中の旧制台北高等学校（以下、台北高校）で〈万葉集〉の講義をした犬養孝と熱心な生徒であった呉建堂が、それから半世紀近くを経て、台湾の人々の短歌と〈万葉集〉との関連を饒舌に語り始めた。そこにどんな思いが託され、それは何を意味するのだろうか。本稿はこのことについて考察する。

なお、本稿では、筆者宛の呉建堂からの書簡の一部を資料として使用する。一九九七年の秋、〈台湾万葉集〉を巡って筆者と手紙やファックスを交わした時のものである。[2] 氏は翌一九九八年十二月に亡くなり、以来二十年近くが過ぎた。

二　台北高校で呉建堂が受けた犬養孝の〈万葉集〉教育

一九四二年四月に犬養孝と呉建堂が出会った台北高校での〈万葉集〉の講義は、どんなものだったのだろうか。一九四二年四月、呉建堂は台湾で唯一の旧制高校である名門、台北高校理科乙類に進学した。ちょうどその年の一月、三十四歳の犬養孝が台湾に渡り、台北高校の教授に着任したばかりであった。犬養の台湾滞在は一九四六年三月の引き揚げまでの四年ほどで、台北高校で教えたのは二等兵として現地召集を受ける一九四五年三月までの三年間に過ぎない。呉建堂は、一九四四年七月に繰り上げて卒業し、その九月に台北帝国大学医学部に進学した。犬養が入学から卒業までを見た唯一の学年の生徒であった。

犬養孝は、下川履信校長の了解の下、国語の時間のすべてを〈万葉集〉にあてた（孤蓬一九九四a：四三）。教科書には、犬養が熊本の旧制第五高等学校（以下、五高）時代に教わった恩師、上田英夫の校注による『万葉集精選』（一九三二　大蔵廣文堂）が使われた（写真1）。「諸言」には「本書は高等程度の諸学校の教科書として編纂したもの」と書かれている。本文と訓は博文館和歌叢書の『万葉集略解』を底本として、日本古典全集の『万葉集略解』、『校本万葉集』（佐佐木信綱ほか編）、『新訓万葉集』（佐佐木信綱編）、『万葉集新考』（井上通泰）、『万葉集講義』（山田孝雄）によって校合し、巻末の地図は高木市之助・久松潜一の『万葉集』（中興館）の万葉集地図を参考にしたとある。本文は、巻一から巻二十まで全巻から抄出された作品が、漢字のみの原文表記と、その左に仮名のみで訓が書かれるという体裁で示されている。

授業で犬養は「第一時間目から、後に『犬養節』と呼ばれるようになった独特の亢揚詠誦調で躍動感を表し、学生たちを魅了してしまった」（孤蓬一九九四a：四三）という。犬養（一九八八）によると、万葉学者で歌人の上田英夫による五高での授業は「週一回、十首ずつの万葉歌を聞き、自分流に歌うことで全部覚え」（犬養一九八八：八五）、それがのちに「犬養節」になったというから、犬養の授業はこれに倣ったようである。

犬養孝は「台北高校の教授をしていた頃、戦争の真っ最中に、

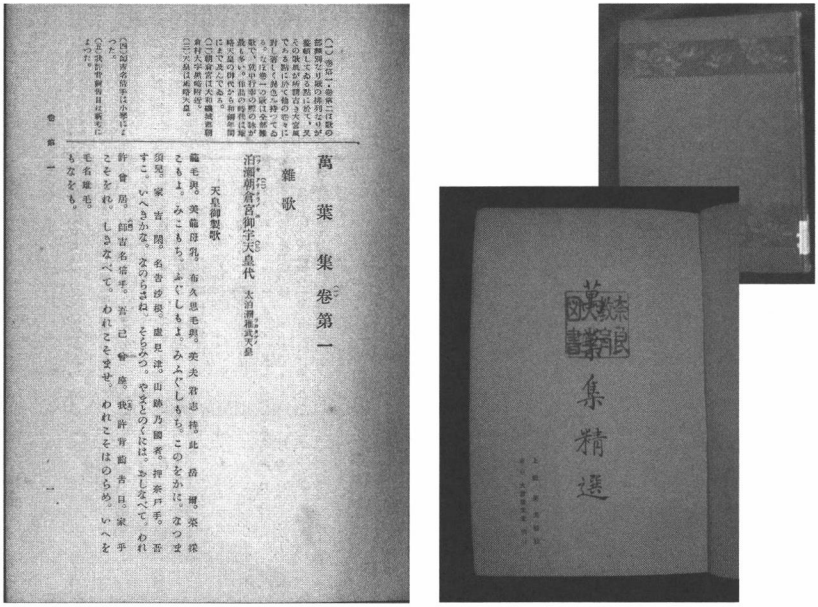

写真１　上田英夫（1932）『万葉集精選』左から本文の最初のページ、扉、表紙

防人の恋愛歌があるのが大切だと生徒に話していました」（犬養一九八八：五一）と後に振り返っている。例えば防人の歌、「今日よりは　かへりみなくて　大君の醜の御楯と　出で立つわれは」（巻二十―四三七三）を、「戦時中よく言われた滅私奉公の精神」の観点から説くのではなく「私は人間の歌だといいました。これを詠んだ下野の今奉部与曽布（いままつりべのよそふ）は、妻や子や母をぎりぎりまでかえりみて、だからこそ『今日よりはかえりみなくて』と防人として苦悩の旅に発つのです。人間の心情があふれた、切ない歌なんですね」と語り、同じく防人の歌である「わが妻も　画にかきとらむ　暇もが　旅ゆく吾は　見つつしのはむ」（物部古麻呂　巻二十―四三二七）をめぐっては、「防人は妻を絵に描く暇もなかったことを悔やんで、頭の中で思い出すしかないんです。人間の心情は同じですね」（犬養一九八八：五一）と語っている。戦後の回想で多少の脚色はあるかもしれないが、犬養が〈万葉集〉の作品を現在の人間の思いにひきつけながら、呉建堂らに熱心に教えたというのは、呉建堂の思い出とも一致している。

呉建堂が『「台湾万葉集」物語』（一九九四）で当時の勉強ぶりを振り返るところによると、「昼休みや課外の時間を利用して図書館に通い、万葉集関係の本を漁り読み」し、「学期試験のとき、まだ行ったこともない『飛鳥地方』や『山の辺の道』に幻の地図までつけて、各名家の意見の相違を述べ、先生をびっくりさせた」（孤蓬一九九四ａ：四三－四四）という。先生（日

本人）を驚かせ、喜ばせたいという姿勢は、終生変わらなかった。

『続編』の犬養孝による「序文」（九～一一頁）には、台北高校時代の呉建堂が、「いつも教室の一番前で、万葉の講義をする私に一つ一つうなずいて聴いていた。（中略）彼は万葉の歌一首一首を通して、万葉の歌の調子とともに、歌の精神を把握するのに懸命であった。彼が一言も漏らすまいと聞き入っていた姿を思い出す」とあり、両者の思い出はここでも一致している。どちらにとっても全身全霊で〈万葉集〉に向き合った日々は、戦争という非常時にあって珠玉の思い出として心に深く刻まれたようである。

三　〈台湾万葉集〉の原型としての呉建堂（一九八一）『花をこぼして』

後に、呉建堂が〈台湾万葉集〉の上巻にあたると決めた出版物（私家版）の書名は『花をこぼして』であった。「台北歌壇」の会員のうち三十四名が紹介された。大幅に改訂されて、集英社版の『続編』に含まれることになる〈台湾万葉集〉の原型である。[3]

一九八一年十月に私家版、非売品として刊行されたA5判の本であるが、このとき、呉建堂はほぼ同じ体裁で短歌に関する二冊の本『孤蓬萬里半世紀』と『人のこころをたねとして』を同時に刊行している。[4]呉建堂は、日本の短歌誌「山の辺」（吉田宏主宰）に、短歌に関する随筆を書いており、その中から、短歌を織り込んだ自伝的エッセイを『孤蓬萬里半世紀』に、現代短歌への意見文や随想を『人のこころをたねとして』にまとめた。自伝的エッセイと同じ要領で「台北歌壇」の会員の人物伝を書いたのが『花をこぼして』であった。この三冊に〈万葉集〉への言及はほとんどない。[5]呉建堂はこのころまで、特に〈万葉集〉を紐解くことも意識することもなかったものと考えられる。

本文から同書の出版の経緯が知られる。一九六八年に呉建堂が縁ある人々の名刺や紹介状を携えて歌人の太田青丘を訪ねたのがそのきっかけであった。そのとき、太田青丘は不在で、母である四賀光子が代わりに応対した。「台北歌壇」の話をしたところ、四賀は「いつの世より生ひつぎ来にし葛ならむこの山道に花をこぼして」との短歌を贈って激励し、これに力を得た呉建堂はこの本の原稿を仕上げた。日本の短歌研究社から刊行されることが決まり、日本へ打ち合わせに行く予定が、心筋梗塞で倒れて延期となり、そのあと多忙を極め一年も遅れたので、他の著作と同時に台北で出すことにしたということである。「後記」には四賀光子への謝辞がある。しかし、もしこの時点でこのまま日本で刊行されていたとして、後の集英社版『台湾万葉集』ほどの話題になったとは思われない。

なお、本書における太田青丘の「序文」は、呉建堂らの短歌に台湾文学としての可能性を示唆した点で注目に値する。彼ら

の短歌を、日本の植民地時代の遺産としてみるだけでなく、「もっと積極的な見方」として、漢詩や漢学が和歌に多くの刺激を与えてきたことに触れ、台湾の人が短歌を作ることで「幾分なりともその国の詩歌文学の刺激と領域の拡充」につながることを祈念したのである。これは日本統治時代末期の一九四三年に黄得時が「台湾文学史序説」[6]で、表現言語が中国語でも日本語でも台湾で暮らす人が台湾を舞台にした作品は「台湾文学」であると定義したことを思い起こさせる。[7]

呉建堂らの短歌が「台湾文学」に寄与する可能性はあったのではないか。島田謹二が一九四一年に、小説等では「本島人」の作家が活躍しているにもかかわらず、「俳句や短歌のように、或意味で「日本的」というべき洗練されたかなり特殊な心境を必要とする部門には、まだ本島人の優秀な作家を出していない」[8]と書いたように、日本統治下の台湾では俳句・短歌は主として「内地人」によって担われていた。[9]「台北歌壇」の参加者の多くが戦後初めて短歌を作るようになった所以である。その意味では戦後ようやく、短歌が台湾の人々の自由になったとも言えたのである。

戦後台湾の俳句の指導者で『台湾俳句歳時記』（二〇〇三）の著者、黄霊芝は、「戦前の台湾俳句は終戦により日本人が引き揚げるのと同時に打ち切られ、今日の台湾俳句とのつながりはない」（黄霊芝二〇〇五：九〇）と言い切り、台湾での日本語俳句[10]を新たに樹立した上で若い世代に向けてその方法を中国語に移した「湾俳」を教え「台湾俳句」の新たな道を切り開こうとした。しかし、呉建堂は、そうではなかった。

四　「台湾万葉集」という名を初めて掲げた『台湾万葉集　中巻』（一九八八）

約百名の会員の数を考えると、『花をこぼして』の三十四名は約三分の一にあたり、あと二冊作れば会員全員を紹介することができる。呉建堂はこうして三分冊計画をたてた。そして一九八八年八月に刊行された二冊目の表紙に『犬養孝教授校閲台灣萬葉集中卷　孤蓬萬里著』（原著の字体による）と書かれた。[11]ここに忽然と「台湾万葉集」という名前が立ち上がり、『花をこぼして』は、『台湾万葉集上巻』にあたると説明されるようになったのである。この記念すべき一書に、犬養孝が贈った序文は次のようなものであった。

日本の奈良朝、神亀天皇の昔の「万葉集」の『汲めども尽きぬ泉』の水は、中華民国台湾の地に伝へ伝へられて『台湾万葉集』として花開いた。これは昔の台北高等学校の私の生徒であった呉建堂君の努力による。

呉君は、私の「万葉集」の講義を熱心に聴き、まさに万葉の歌に心酔して、その流れを汲む短歌の創作に精進し、同好の士を募り『台北歌壇』を興した。（中略）呉君は万葉を愛読され、万葉を研究し、万葉調の歌を創作される。

医家を本業としながら、万葉へのこの理解もまた偉とするに足る。

私家版の小さな本には大きすぎる序文である。しかし、注意して読むと、事実が別のものに書き換えられているのがわかる。呉建堂が台北高校時代に熱心に講義を聞いたのは事実でも、呉建堂の短歌の創作は台北二中時代の国語教師で歌人であった川見駒太郎の影響を受けるもので、必ずしも〈万葉集〉が意識されてはいなかった。医業の傍ら短歌を作り現代短歌の作品を広く熱心に読んでは意見文を書いていた呉建堂には、〈万葉集〉を愛読し、研究した形跡はなく、文章の中に〈万葉集〉への言及は見当たらない。

しかし、本書で呉建堂は、いきなり熱心に〈万葉集〉との関係を語り始める（孤蓬一九八八：一～三）。高校時代に犬養孝から「万葉の心は現代人の胸の中にも生きて居る」と教えられたことから「万葉の心は日本人特有のものでなく、ヒューマニテイのある人たちの心に共通のもの」ととらえ、「歌は風土とその時代の生活に密着するものである」と教えられたことから、「現代の台湾の風土と生活に結びついた歌を作れば、台湾万葉集になる」と考え、「幾多の苦難を排して万葉のいぶきを心ある人の間に吹きつづけて生かし残さむと努力して来た」。それで今回「思ひ切つて『台湾万葉集』中巻と名付けた」というのである。そして、最後を「今評判になつて居る『俵万智』の『サラダ記念日』が日本の現代短歌を代表するものであるとする人たちには、この三巻も読んで戴きたい」と締めくくった。

前半で台湾短歌への志を示しつつ、最後は「日本の現代短歌を代表する」のは〈台湾万葉集〉であると言わんばかりである。万葉学者、犬養孝の「太鼓判」とともに〈台湾万葉集〉という圧倒的な名称を得て、呉建堂の計画は新たな命を得た。日本文学から独立するのではなく、日本文学の源といえる〈万葉集〉の正統な継承者であると自らを位置づけたのである。その意味でこの時が〈台湾万葉集〉の誕生であり、日本で多くの読者に読まれるべき使命が決定的になったというべきであろう。

その後、下巻が一九九三年一月に刊行されて十余年をかけた三分冊の出版は完結したが、今度はこれを日本人に認めさせなければならない。呉建堂は日本で驚かれ、喜ばれることを願って、「短歌研究の年鑑の名簿を頼りに」「一人一人宛名を自分で書いて」「何日も徹夜をし」、『台湾万葉集下巻』を二千名に謹呈した。[12] この作戦は功を奏し、受け取った大岡信が朝日新聞のコラム「折々の歌」で十九回にわたって取り上げたのをきっかけに、一九九四年一月に岩波ブックレット『「台湾万葉集」物語』が、そして『台湾万葉集』（一九九四）、『台湾万葉集続編』（一九九五）『孤蓬万里半世紀（「台湾万葉集補遺」を含む）』（一九九七）と出版が続き、話題になった。

五　犬養孝と呉建堂による〈台湾万葉集〉の展開

「台湾万葉集」と名付けられて台湾で、そして日本で矢継ぎ早に出版された呉建堂による出版物のすべてに、犬養孝は心を込めて序文を書いた。一九九五年の『続編』に書き下ろした序文では「青年の日にうけた万葉を、ただひと筋に守りつづけ、しかも、生きた歌の制作をつづけて指導されるその情熱や、この世の奇跡というべきである」（孤蓬一九九五：九）、「青年の日にわたくしは心血をそそいで学生諸君に語った。それが呉君の心情の中心となって燃えつづけることを思うと、菅の根の根もころごろに慟哭したいような気持ちでいっぱいになる」（孤蓬一九九五：一一）と、高揚した文体で感動を述べ、呉建堂を手放しで称えている。

そして、最後の『孤蓬万里半世紀』（一九九七）には、九頁にわたって呉建堂の人生をたどる序文を書くが、その冒頭に、初めて「詫び」が書かれているのが目を引く。

> 呉君よ、われわれの力でどうにもならぬことだけはわかる。あんなに一生懸命だったジャパニーズの呉君が、チャイニーズになろうとは。運命と思って、さらりと時局に流してくれ。その詫びを言って、はじめてペンがとれるのだ。
> （孤蓬一九九七：五）

犬養の授業を受けていた当時、呉建堂は日本名、大田健太郎[13]を名乗り、自ら「日本人（＝ジャパニーズ）」であることに誇りをもっていたのを、犬養は知っていたのである。一方、『台湾万葉集』『続編』の反響の大きさに自信をもった呉建堂は、同じ本の「自序」に、〈台湾万葉集〉と名付けた理由を、台湾の短歌は「万葉調」であること、〈万葉集〉とは「時代的背景の上からも作者の心情の上からも相似点」（一五頁）が多いこと、にあると説明するに至った。「万葉調」という語は、一九八八年に犬養孝が初めての序文で呉建堂らの短歌を形容したことばである。呉建堂は、「現在の日本の自称玄人歌人は、無味乾燥な短歌を作って（中略）威張って居るが、他人には分らない短歌が多く、しかも分らない短歌をお互いに誉め合って居る。台湾の人の短歌は古い、分りすぎるとか言われるが、（中略）日本人にも「万葉時代に還って愛のこもった短歌を作ってください」と申し上げたいと思う」（『日本歌人クラブ会報　一〇三号』（一九九四）「平成六年春の総会記念講演要旨　台湾の戦前戦後（呉建堂）」）と、尊大とも聞こえる発言が目立ってくる。かつて大田健太郎と名乗った呉建堂は「日本人」になりたかった。呉建堂の〈万葉集〉への執着はそのまま日本への執着であった。〈万葉集〉の正統な継承者と自らを位置づけたとき、呉建堂は叶わぬ夢が叶った思いに酔ったのではなかったか。

〈万葉集〉そのものは、ウィリアム・G・アストン[14]、カール・フローレンツ[15]、アーサー・ウェリー[16]、ドナルド・キーン[17]、リー

ビ英雄[18]ら欧米の日本文学研究者がこぞってその表現の巧みさ、文学的価値の高さを評価するところで、その作品を伝えるべきは「日本人」に限らないことは言うまでもない。それにもかかわらず犬養は、詫びなければならなかった。日本統治下の台北高校での教育は「日本人」教育であり、そのための教材としての役割を〈万葉集〉が帯び、自らそれを担ったことを、犬養は否定できなかったのであろう。

「日本人」の心の源として〈万葉集〉を教わった呉建堂が、現代日本人よりも、自分たちのほうが正統な「日本人」の心を体現していると主張し、日本人読者との間に軋みが生じてきたとき、犬養は自らの責任に気づいたのではなかったろうか。しかし、その思いは呉建堂には届かなかったし、たとえ届いたとしてもどうしようもなかった。とまれ、彼らの出版計画は遂行された。そして、翌一九九八年、十月に犬養孝が享年九十一歳で、十二月には呉建堂が享年七十二歳で、相次いでこの世を去っていった。

六　おわりに

呉建堂と犬養孝が二人三脚で日本社会に押し出した書物が「台湾万葉集」と名付けられたことは、犬養にとっては戦時中の自らの〈万葉集〉教育が半世紀後にもたらした手柄を称える表現であり、呉建堂にとっては自分たちの短歌が、憧れてやまない日本の短歌の正しい継承者であることを証明する表現であった。二人の同床異夢[19]ならぬ異床同夢とでもいうべき夢は〈万葉集〉という語を冠することで実現した。

しかし、呉建堂が台湾の自分たちの短歌こそが、日本の短歌のあるべき姿だと主張して容れられず苛立つようになると、犬養は、台北高校で「日本人」であった彼に〈万葉集〉を通して「日本人たること」を教えた果ての矛盾に気づき始めた。

呉建堂の主張は、日本社会にも台湾社会にも受け入れられるものではなく、何より〈台湾万葉集〉に登場する会員の多くは、そんな野望には無関心であった。一九九七年十月二十日付け河路宛の書簡に「『台湾万葉集』そのものは日本歌壇の一地方歌壇で沖縄歌壇位の値打ちはあるのを日本人は植民地歌壇扱いです」と書いてよこした呉建堂は、ついに植民地時代の呪縛から解放されることがなかったようである。戦争中の〈万葉集〉教育は、それを熱心に受けすぎた一人の台湾青年に、生涯ぬぐえない「日本」への愛着と復讐心を刻印した。〈台湾万葉集〉という名前には、そんなこもごもがこもっている。

注

（1）笹沼（二〇一二）は〈台湾万葉集〉が犬養孝の影響下に成立したことに注目し、当時の台湾における〈万葉集〉ひいては〈国文学〉における風土論に潜む政治性の分析を行った。そして、犬養がその政治性に無頓着であること、犬養にも呉建堂にもその万葉観が近代以降の〈創られた伝統〉であることへの認識が

欠落していることを指摘している。

（2）呉建堂と河路との交流は、『台湾萬葉集　下巻』の贈呈を受けた河路が、河路（一九九七）を書いたことをきっかけに始まった。

（3）集英社版の『台湾万葉集』（一九九四）は、台湾で刊行された「下巻」に基づいている。

（4）『花をこぼして』の「後記」によると、随筆集『文武仁の旅』『わが剣の思ひ出』も同じ一八八一年十月に同時に刊行されたとある。

（5）数少ない例として8ページに「『昭和万葉集』に匹敵する」という意識が述べられている。

（6）黄得時の「台湾文学史序説」「台湾文学史（二）（三）」は一九四三年の『台湾文学』（三－三、二～一一頁、四－一、六〇～六九頁、同九七～一一八頁）に掲載された（中島・河原・下村二〇〇一）。

（7）黄得時（一九四三）「台湾文学史序説」より。この文章では、その他、台湾の短期滞在者、また台湾以外の出身者で台湾に来たことがなくとも台湾に関する作品を書いた場合なども、必要があれば取り上げるとし、内地人の台湾における文学活動のみを扱うような「狭い見解」は取らない、としている（中島・河原・下村二〇〇一：八七）。戦後の葉石濤（二〇〇〇）もこの枠組みを踏襲している。

（8）一九四一年五月に『文芸台湾』に発表された島田謹二「台湾の文学的過現未」より（島田一九九五：四六七）。

（9）「本島人」も皆無ではなかった。頼衍宏（二〇〇七）によると、台湾で最初の短歌結社を興した宇野覚太郎による「いかづち会吟集」の一九〇二年八月十五日の「台湾雑詠（課題）」に蘇嶽という台湾人が「土匪一人蕃刀を横へ生首を下げて夕月淋しき森をゆらりゆらり行く」を出詠し、宇野は「生首をさけて蕃刀を横へて夕月の森を土匪ゆらりゆらり」と添削したという。同氏の博士論文要旨によると、台湾人による詠作は一九〇二年に始まり一九一九年に「中央歌壇」に進出、「台湾芸術」においては陳奇雲が選者をつとめた「本島人歌壇」が存在した。

（10）黄霊芝は台湾の季節や風俗を題材に自由に詠み、日本での出版物『台湾俳句歳時記』（二〇〇三）では台湾独自の俳句を紹介、解説している。

（11）日本の集英社版では呉建堂の「編著」とされるが、台北で出された私家版はいずれも自らを「著者」として歌集や随想集と同じ扱いである。呉は会員の短歌を織り込んでその人物伝を自ら書き下ろしたという意識だったのではないかと思われる。

（12）鍵括弧内の引用は一九九七年十月二十日付の河路宛の書簡による。また、同年九月十七日付、河路宛の書簡に「私の著書は（中略）いづれも台湾出版で関係者には全部免費贈呈で各2千冊送りましたので、医者としての収入の大部分を使ひました。」とある。

（13）大田健太郎というのは、呉建堂の日本統治下における改姓名による日本名である。台北高等学校では、「大田健太郎という名で学んだので、呉建堂という名の卒業証書は存在しない」（孤蓬

一九九七：六六）。〈高校の卒業証書は日本名大田建太郎学者の如し〉と詠み、呉はこの名前が気に入っていた。

(14) W・G・アストン（一九八五）で〈万葉集〉の作品は「その後、それらの作品をしのぐものは出ていない」（三一頁）とその文学的完成度の高さに感嘆している。

(15) カール・フローレンツ（一九三六）では、「日本詩歌の最初の開花期　萬葉集」に〈万葉集〉を「全日本詩歌の最善のものである」（一三五頁）と述べ、六八頁にわたって（一三五～二〇二頁）論じている。

(16) アーサー・ウェリー（一九八九）では芸術的詩歌の最初にしてもっともすぐれた詩華集として全体の三分の一以上を〈万葉集〉の作品にあてている。

(17) ドナルド・キーン（二〇一三）では、〈万葉集〉を「最古にして最高」のものとして二〇〇頁近くにわたって重点的に紹介し論じている。

(18) リービ英雄（二〇〇四）は〈万葉集〉を「世界にも例をみない、詩歌の集大成」（ii頁）と思い「世界文学」として翻訳したと書いている。

(19) 陳（二〇〇一）は、台湾での日本の統治における「同化」は、日本側では「皇民化」を意味したが、台湾人にとっては、自主的な西洋文明の摂取を含む近代化を促進するものであったことを主張し、これを「同化」の「同床異夢」と名づけている。

参考文献

W・G・アストン／川村ハツエ訳（一九八五）『日本文学史』七月堂

アーサー・ウェリー／川村ハツエ訳（一九八九）『日本の詩歌―うた』雁書館

上田英夫（一九三二）『万葉集精選』大蔵廣文堂

犬養孝（一九八八）『わが人生　阿蘇の噴煙』大阪市民大学センター

河路由佳（一九九七）「短歌と異文化との接点―『台湾万葉集』をヒントにボーダーレス時代の短歌を考える」『短歌研究』一九九七年十月号、短歌研究社、六三～六九頁

河路由佳（二〇〇〇）「日本統治下の台湾における日本語教育と短歌：孤蓬萬里編著『台湾万葉集』の考察」『人間と社会』十一号、二〇〇〇年八月、東京農工大学、四七～六四頁

河路由佳（二〇一七）「呉建堂の『万葉精神』と『台湾万葉集』―戦後台湾の日本語短詩系文芸の担い手、黄霊芝、黄得龍に照らして」『ことばと文字』七号、一七六～一八七頁

川見駒太郎（一九六八）『歌集　履歴書』旧台北州立台北第二中学校同窓有志会

黄霊芝（二〇〇三）『台湾俳句歳時記』言叢社

黄霊芝（二〇〇五）「台湾の俳句―その周辺ほか」『国文学　解釈と教材の研究』第五〇巻九号、八八～九四頁

ドナルド・キーン／土屋政雄訳（二〇一三）『日本文学史　古代・

中世編（一）』中公文庫
孤蓬萬里（一九八一a）『孤蓬萬里半世紀』（私家版）
孤蓬萬里（一九八一b）『花をこぼして』（私家版）
孤蓬萬里（一九八八）『台灣萬葉集　中巻』（私家版）
孤蓬萬里（一九九三）『台灣萬葉集　下巻』（私家版）
孤蓬万里（一九九四a）『台湾万葉集物語（岩波ブックレットNo.三二九）』岩波書店
孤蓬万里編著（一九九四b）『台湾万葉集』集英社
孤蓬万里編著（一九九五）『台湾万葉集続編』集英社
孤蓬万里編著（一九九七）『孤蓬万里半世紀』集英社
笹沼俊暁（二〇一二）『「国文学」の戦後空間―大東亜共栄圏から冷戦へ』学術出版会
島田謹二（一九九五）『華麗島文学志―日本詩人の台湾体験』明治書院
陳培豊（二〇〇一）『「同化」の同床異夢―日本統治下台湾の国語教育史再考』三元社
中島利郎・河原功・下村作次郎（二〇〇一）『日本統治期台湾文学文芸評論集（第五巻）』緑蔭書房
カール・フローレンツ／土方定一・篠田太郎訳（一九三六）『日本文学史』楽浪書院
葉石濤／中島利郎・澤井律之訳（二〇〇〇）『台湾文学史』研文出版
頼衍宏（二〇〇七）「日本語時代の台湾文学―短歌結社「新泉」と宇野覚太郎」『国際日本文究集会会議録』三〇、二〇七～二一三頁

＊なお、頼衍宏の博士論文「日本語時代の台湾短歌―結社を中心にした資料研究」（二〇〇八年　東京大学）については、インターネット上に公開されている「論文の内容の要旨」を参照した。

リービ英雄（二〇〇四）『英語で読む万葉集』岩波新書、岩波書店

【謝辞】

二〇一六年九月二十四日に青山学院大学における小松靖彦先生主催「戦争と萬葉集研究会」第6回研究会において「日本統治下の台湾における日本語教育と短歌：孤蓬萬里編著『台湾万葉集』の考察」という題でお話して以来、小松先生には、多くをご教示いただき、同研究会のみなさまにも、いろいろお世話になりました。記して感謝申し上げます。

（かわじ・ゆか／日本語教育研究者・青山学院大学非常勤講師）